時間も大事にしようって声掛けできる。やっぱりあのとき、なにが大事かを考えたからだと思うんです。

大和田：医師だけでなく、患者さんや地域の皆さんもそうですよね。

渡邉：そう。今回、育休に入るときも、元気な赤ちゃん産んでね、お大事にって声をかけてくださる患者さんが多くて……。人間として豊かになれる時間をもらっているという気がします。

中山：皆さんのような若い医師がいわきに来てくれるのは、ここでいろいろな経験を積めるということだけじゃなくて、女性としての働きやすさとか、人として豊かに生きられるようにみんなで支えようっていう環境が、ちょっとずつ生まれているからだと思います。

――総合診療医という横のつながり。そして、仕事とライフの両立を先輩たちが切り拓いたという上から下への一方向だけでなく、産休／育休の先輩を後輩が支えるという双方向の縦のつながり。女性医師の縦横のしなやかな関係性は、いわきの医療の大きな力だと感じました。

座談会のときには出産直前だった渡邉聡子先生。ZINE制作中に、無事出産されたということで、聡子先生と赤ちゃんのステキな写真を掲載。

＼ ここでは紹介しきれないので、ぜひサイトをのぞいてみてください！ ／

WEB サイト **https://iwakinoiryo.com**

編集後記

いわきの女性医師座談会、実は昨年も行っていまして、２年連続で開催してます。病院やキャリアの違いを超えてサポートし合う関係性が素敵すぎて、毎年開きたいなぁと思っていますw。座談会の時は出産直前だった渡邉先生。上の写真にもあるように、無事出産されました。まさに医師としての仕事と自らのライフイベント＆暮らしの両立真っ最中。ライフイベントと医師としてのキャリアを、お互いに支え／支えられる、いわきの女性医師のしなやかなネットワーク。女性医師の皆さん、いわきで働き、暮らしませんか？

取材協力
かしま病院、いわき市医療センター

いわきの地域医療

SNS

いわきの医

Follow Us!!!

発行／問い合わせ　いわき市地域医療課

HOT! FUN! IWAKI!

MIRAIの医療ZINE（人）

TAKE FREE

いわきの地域医療

03

特集　いわきで働く女性医師座談会

いわきで働く女性医師座談会

大学で医学を６年間学んで国家試験に合格した後も、初期研修、後期研修と長期間の研修が続く若手医師。特に女性は、医師としてのステップアップと、出産や子育てなどのライフイベントが重なり、キャリア形成に壁があるとも指摘されています。女性医師たちのキャリアについての悩みをシェアすべく、５人の女性医師に、課題やモヤモヤを語ってもらいました。

文 = 小松理虔　写真 = 鈴木宇宙

いわき市医療センター
熊田 佳那子 医師

かしま病院
中山 文枝 医師

かしま病院
荒井 怜 医師

菅波医院
大和田 泉 医師

かしま病院
渡邉 聡子 医師

――今日は、女性医師の皆さんのキャリアと結婚、出産などライフイベントについて考えるべく、５名の医師に集まってもらいました。よろしくお願いします。中山先生と渡邉先生には女性医師をサポートする側から、大和田先生、荒井先生にはご自身のキャリアとライフイベントについて、熊田先生には研修医として感じる葛藤やモヤモヤをお話しいただければと思います。

中山：なにかあったら私たちがぜんぶ受け止めますから(笑)、今日は思い切って話してください。みなさん、よろしくお願います。

熊田：研修医２年目の熊田です。宮城県や福島県内で研修先を探していたのですが、周産期医療をしっかりやらせてもらえる市中病院がなかなか見つからず、新生児科や小児外科のあるいわきの医療センターを選びました。

大和田：私はいわきの出身です。実家が病院という背景もあって、中学生のころ医師を目指し始めました。初期研修は水戸市の病院だったんですが、そこで夫と出会って結婚して、そして初期研修の後半に妊娠が判明して……という感じでトントンと来てしまった感じです。

渡邉：ストレートにステップアップしてくると、ちょうど２０代の後半に差し掛かるタイミングで初期研修医になるという方が多いですよね。パートナーができたりして、結婚や出産を意識する時期でもあります。

大和田：はい。夫が実家の病院で働くことになり、私はこれからがキャリア形成という時期でしたので、当時の共立病院（現在のいわき市医療センター）で後期研修医として働き始めました。ですが、そこで流産という経験をしまして…。本当にショックでした。

熊田：そんなことがあったんですね…。

大和田：医師としてのキャリアを作っていくのも大事な時期ですけど、妊娠や出産は年齢的な問題でもあるし、私自身、早いうちに授かりたいなって気持ちを大事にしたいと思っていました。共立病院の先生たちも私を気にかけていただきましたが、当時の医局の中で女性は私一人。女性特有の問題は相談しにくいところがあったかもしれません。

中山：女性の懸念って、働き方とかキャリアのことばかりじゃないし、身体的なものだけじゃなく精神的なものもあります。周りに女性が一人もいないというのは、ちょっとつらいものがあるよね。

大和田：その後、一度自分の生活をリセットしようと思って退職したんですが、自分のキャリアのことも気になり始めて。そこで病院を探していたとき、かしま病院がヒットしたんです。総合診療科があったことが大きいと思います。医師になる以上、どんな専門に進むとしても患者さんを総合的に診たいと考えていました。

総合診療医たちのつながり

渡邉：あのころ、いわきで定期開催されている「家庭医塾」という勉強会があり、大和田先生の先輩もかしま病院に所属しながらその講座で学んでいたというつながりも関係しているかも。

大和田：今もその関係に助けられています。育休で休んでいる間もその時のメンバーが私のサポートに入ってくれています。文枝先生たちのような先輩が、病院と戦って切り拓いた道が後輩たちにも引き継がれていると感じます。

荒井：私は福島県立医科大学のプログラムで、４年ある専攻医のうちの１年目はここかしまで、ということで来ているのですが、渡邉先生の「代診」など、かしま病院ではいろいろなことを任せてもらっています。外来、救急外来に在宅と、やってないことはないくらい。

渡邉：荒井先生、ほんとに頑張り屋さんなんですよ。私自身も身重の状況で、来月三人目を出産する予定なんですが、荒井先生に自分の患者さんを引き継いでもらっています。大和田先生もそうですが、総合的に診ようという思いがあるからこそ引き継げるものなんですよね。

荒井：聡子先生の診てる患者さんって、たくさんの疾患を抱える強者な方もいらっしゃって（笑）。だからこそ、生活の環境とか人間関係とか、背後にあるものも総合的に診ていかざるを得ないというか、総合的に診ようという意識になる気がしますね。

大和田：私も、指導医の先生から手厚いフォローをしてもらえました。自分の状況に合わせて仕事を組み立ててもらえるんです。私の場合は、常勤医として週４日の勤務にしていただき、在宅や入院患者の対応なども組み合わせながら現場の仕事を続けさせてもらえました。

医師と子育て

熊田：大和田先生、その間の子育ってどうでしたか？

大和田：私の場合は、育休が終わった後、保育園に通う前にかしま病院の託児所に預けました。慣れてから保育園に入ったほうがいいかなって。託児所のみなさんもすごく工夫していて、子どもたちもすごく楽しそうでした。

渡邉：かしま病院では「産後パパ育休」という制度を導入しはじめました。完全に育休するのではなく、医師として働きながらお家での時間も長く保とうという制度です。

中山：私のころとは違って、研修プログラムもだいぶ変わってきて専攻医の期間中に育休もできるようになってきました。現場で求められることも変わってきてるけど、大前提として必要なのは仕事場の理解。ＩＣＴの活用が広がってきたのも大きいです。

熊田：改めて皆さんのお話を伺って、選択肢が増えてきてるんだなってことを感じました。

渡邉：私は、震災と結びつけちゃうんですけど、あの時、人にとってなにが大事かっていうことを誰もが考えたと思います。だからこそ、休めるなら休もう、家族と向き合う

裏面につづく